

(財) アジア学生文化協会 創立50周年記念第3回シンポジウム

アジアのヒューマンネットワークを問う 2008**— 日本留学後の進路 —**

日時：11月29日(土) 14:00～17:00

場所：文京シビックセンター スカイホール (26階)

主催：(財) アジア学生文化協会

共催：(財) 文京アカデミー 協賛：(財) 東芝国際交流財団



石井米雄



金 栄作



Itti Rittaporn



呂 新一



符 祝慧



Dao Duy An

(財) アジア学生文化協会 (ABK) では、今回が3回目となる創立 50 周年記念シンポジウムを (財) 東芝国際交流財団の協賛を得て、(財) 文京アカデミーとの共催で開催しました。今回は「日本留学後の進路」をテーマに、韓国、タイ、中国、シンガポール、ベトナムからの元日本留学生で、現在日本で活躍するパネラーの方々から、留学生が卒業後日本で仕事をし、生活していくことについて、それぞれのお立場、ご経験から貴重なお話をお聞かせいただきました。また、第1回、第2回でコーディネーターをお願いいたしました石井米雄先生には、今回基調スピーチをいただきました。このシンポジウムの模様を一挙お届けします。

プログラム

13:30	開場
14:00	開会 挨拶 (財) アジア学生文化協会理事長 小木曾 友 (財) 文京アカデミー理事長 宮下 眞
14:10	パネラーの紹介
14:15	基調スピーチ 石井 米雄先生
14:45	金 栄作先生の進行でスピーチ / 討論開始
15:30	前半終了・休憩 (10分)
15:40	討論再開
16:50	質疑応答
17:00	閉会 <総合同会> 工藤正司 ((財) アジア学生文化協会 常務理事)

(工藤) 皆様、本日はようこそお出でくださいました。心から感謝いたします。これから、(財)アジア学生文化協会と(財)文京アカデミーの共催によって、「アジアのヒューマンネットワークを問う2008～日本留学後の進路」と題してシンポジウムを開催致します。最初に主催者からご挨拶を申し上げます。(財)アジア学生文化協会の小木曾理事長をお願いします。



小木曾友(財)アジア学生文化協会理事長

(小木曾) 本日はお寒い中、また土曜日午後というお休みの時間にご来場賜りまして誠にありがとうございました。財団法人アジア学生文化協会は50周年を記念して、一昨年から「アジアのヒューマンネットワークを問う」という、連続シンポジウムを催しております。第1回が一昨年、昨年第2回、そして、今年が第3回でございます。

今年のテーマは「アジアのヒューマンネットワークを問う～日本留学後の進路」ということですが、これは昨年の第2回目、「アジアのヒューマンネットワークを問う～日本留学を帰国後にいかにかしたか」というテーマを受けて、昨年はそれぞれの国に帰った方々が体験を話して下さったのですが、今年は日本で仕事をしたり、生活をしたりしている方々にお話をさせていただくことになっております。

さらに、留学生にとらわれないで、最近様々な外国人が日本国内には増えています。自動車産業などに南米の日系人がたくさん入っていたり、あるいは研修生もいろいろな企業に入っています。それから、最近始まりましたインドネシア、フィリピンの介護福祉士とか看護師の研修、さらに観光庁というのができて、日本に観光客をたくさん呼ぼうとい

うことで、これからも益々増えてゆくことになると思います。今日は元留学生の代表ということなのですが、留学生とかにとらわれないで、幅広く日本における外国人が、仕事をしたり、生活をしたりする時のいろいろな問題、あるいは外国人が増えて、日本社会がこれからどうなっていくのか、ということも含めて幅広いトークをお願いしたいと思っております。

今回も石井米雄先生をコーディネーターとし、中国、韓国、タイ、シンガポール、ベトナムの5カ国の元留学生の代表の方にご出席いただき、活発なトークをお願いしたいと思っております。

共催をしてくださりました(財)文京アカデミー、それから助成していただきました(財)東芝国際交流財団、それからこの会の開催のためにいろいろと準備をしてくださりました両団体のスタッフの皆様、心から御礼を申し上げます。

では、今日は最後までお付き合いいただきますようお願いいたします。ありがとうございました。

(工藤) 続きまして(財)文京アカデミーの宮下眞理事長をお願いします。



宮下眞（財）文京アカデミー理事長

（宮下） 只今、ご紹介をいただきました、（財）文京アカデミー理事長の宮下でございます。本日、「アジアのヒューマンネットワークを問う2008」のシンポジウムにご臨席くださいます。誠にありがとうございます。私どもは第2回目から共催で名前を連ねさせていただいております。このシンポジウムの実施に当たりますとは、先ほどもご挨拶にございましたが、アジア学生文化協会様のご尽力によりまして、実施することができております。心から感謝申し上げたいと思います。

理事長さんのご挨拶でもお話しりましたが、昨年は、本国にお帰りになった方々のその後の経験を中心にいろいろお話し戴き、大変ご好評いただいたと思っております。私も聞かせていただいたのですが、大変興味深いお話で、非常に参考になったと思っております。

今年は、留学後も日本に留まって進路を開いている方々のお話を中心にお伺いするようになっています。今回も聞かせていただくのを楽しみにしているところでございます。皆様方も様々な貴重なご意見をお持ちかと思いますが、今後のものの見方、考え方

の参考にしていただければ幸いですと思っております。

はなはだ簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

（工藤） 次に、パネラーの方々のご紹介をさせていただきますが、その前にご了解をいただきたいことがございます。皆様に事前にお配りしたチラシには、コーディネーターに石井米雄先生、それからスピーカーとして5名の方のお名前を載せており

ますが、ちょっと趣向を変えまして、石井米雄先生には基調講演をいただきまして、スピーカーの一番上に出ておりますキムヨンジャク（金榮作）先生に、司会進行をお願いしたいと思います。

そのようなことで、あと4名の方々には従来通りスピーカーとしてご発言いただきたいと思っております。ご了承いただけますでしょうか。よろしく願いいたします。

それでは、皆様にお配りしております、この緑色のチラシにパネラーのご紹介として主なことが書いてありますので、それをご覧いただきたいと思っておりますが、若干つけ加えさせていただきますと、基調講演をして下さいます石井米雄先生は、現在、国立公文書館アジア歴史資料センター長をなさっておられまして、文化功労者で、京都大学名誉教授であります。先生は大学を出られてから一度外務省に入られたのですが、その後、アジアの文化、社会、歴史等の研究を志されまして、学術の方へ転換され、京都大学東南アジア研究センター教授、同所長等を歴任されて現在に至っ

ておられます。

先生は東南アジアの文化・歴史・社会の分野での研究では第一人者でございます。若い頃からお仲間と研究会をアジア文化会館で開いておられた関係で、以来ずっとアジア文化会館のほうでご懇意にさせていただいている先生でございます。

それから、司会進行をさせていただきますキムヨンジャク先生は、韓国のおそらく戦後の日本が招聘した第一番目の韓国留学生で、当時はまだ日韓基本条約が締結されていませんでしたので、伺ったところでは、「留学ビザ」はもらえなかったそうです。

東京大学で国際政治を勉強されて、博士号をとられて、韓国に帰られてからは、現代日本学会会長をなさったり、第12代の国会議員をなさいまして政界にも進出されましたが、その後学術の方に戻られて、専門に学術の方を追求されている先生です。先生は、韓国の留学生の中では第1回目ということもありますけれども、それ以上に頭の良さと、人柄において韓国の留学生みなさんが先輩として仰いでいる方でございます。

次にスピーカーの方々をご紹介しますと思いますが、実はスピーカーの方々は、ご自分の発言の中で経緯をご紹介下さることになっておりますので、この資料をご覧戴くことにして、そちらのほうに任せていただきたいと思えます。

それでは、最初に基調講演を石井米雄先生をお願いいたします。

(石井) ご紹介いただきました石井でございます。座ったままで失礼したいと思います。今回のテーマは「アジアのヒューマンネットワーク」というわけであります。「ヒューマン

ネットワーク」と簡単に言うのですが、「ヒューマンネットワーク」が果たして出来るのだろうか出来ないのだろうか。出来ないとしたらなぜ出来ないのか。出来るとしたらなぜ出来るのかということを考えないと、「ヒューマンネットワーク」というのは言葉として聞こえは非常に良い言葉なんですけど、現実性がないということがありますので、その問題を若干考えてみたいと思っております。

実は私は、先週までマレーシアに行っておりまして、その前はヨーロッパに行っていましたけれど、とにかく日本の人が海外に出かけることがすごく多くなってきていますね。それで、一つ笑話をさせていただきますと、パリにある研究所に参りまして、その研究所を出たところからはエッフェル塔が実によく見えるんですね。坂の上で。そこに日本人の観光客がいたわけです。何を喋っているのかと聞いてみますと、「エッフェル塔って素晴らしいね、テレビと同じだね」と言うんですね。びっくりしましたね。目の前でエッフェル塔を見ているのに、それを日本で、テレビで見たエッフェル塔とアイデンティファイさせることによって安心すると、これはちょっとおかしい話じゃないかと。その時つくづく思いましたのは、日本人はカプセルの中に入って移動しているという感じであって、ちょうど宇宙服を着て外気になるべく触れないようにする、そういうことがあるのではと思います。

で、今から30年くらい前、私が大学にありました時に研究留学でロンドンに行きました。そのロンドンに来ている多くの日本人はもの凄い真面目な勉強家なんです。ところがほとんど、イギリス人とは付き合おうとしない。大英図書館に行って、一生懸命本を読んで、こんなにたくさんゼロックスを持って帰って



石

石井 米雄（日本）

国立公文書館アジア歴史資料センターセンター長、文化功労者、京都大学名誉教授。外務省を経て京都大学東南アジア研究センター教授、同所長など歴任。

行く。ですから、私の同僚のイギリス人からはミスターゼロックスがまた来たよと言われるくらいです。つまり日本人は非常に真面目なんですけれども人間と触れ合うということをあまりしない。大英博物館に行ってそこで勉強して帰っていくというわけです。

もっとおかしな笑い話をしますと、私は英国でなるべく日本人と付き合わないようにしていたんですが、ある時パブに行ってビールを飲んでおりましたら、隣にいた人に「あなた日本人」と言われたので、これはまずいことになったなと思ったのですが、しょうがないから「あ、そうです」と言ったんですね。そうすると、その方は東京のある有名大学の先生だったんですが、「私はここにしばらくいるんですけど、困ったことがあるんです」

と言うので、「何ですか」と聞いたら、「日本では英語がわからなかったら教えてもらえたけど、ロンドンでは誰も教えてくれないんですよ」。これはもうブラックユーモアですね。つまり全然イギリス人と付き合ってない。したがってパブに行って日本人を見つけては日本人と話しをする。したがって日本とイギリスの間にヒューマンネットワークが出来るわけがないですね。

こういう問題が国際化、国際化と言って成田から出るのが何百万人だということで、いかにも日本が世界の中に入り込んでいるというふうみんな思っていますが、現実はその点ではないという点が一番の問題なわけです。

一つ大事なことは、日本と例えばインド、日本とシンガポール、日本とドイツでは価値観が違うわけですね。実はご承知のようにインド人は「イエス サー」と言う時にクビを横に振るわけですね。どうして縦に振ってこないのかなと思うんですけど、「イエス サー」と横に振る。どうも気になってしょうがない。だけど、インドではこうすることが「イエス」である。日本ではこうすることが「イエス」だと。つまり、そういう同じことを言うのにやり方がまったく違う。そのことをやはり理解しないと、というふうに思うんです。

どうして日本は人間的な外国との触れ合いが少ないのかとその理由を考えてみますと、はるかかなた昔には、遣唐使とか遣隋使がいて、中国に渡り、学問を学んで帰ってくるわけですが、その後、日本と中国の間の人間関係はほとんど切れてしまうんですね。中国との人間関係が切れてからは、山ほど中国の文献を手に入れて、それを一生懸命読むわけですね。つまり、文献を通して相手を理解しようとする。

これまた笑い話ですが、ある有名な先生が、いわゆる東洋学では大先生なんですけど、私は中国には行かないとおっしゃった。行くと目が曇るからと言うのがその理由です。つまり現実の中国人がどうかということには全然関心がなくて、文献の中で組み立てられた中国、文化というものを知識として学び、それで中国を理解したと思ってしまっている。これは我々は気がつかないんですが、意外とそういう間違いを多く持っている。それが現代まで続いているということですね。

日本では“外人”という言い方をします。外人とは外の人ですね。つまりネットワークというのは本当はうちの中に入っていないと困るんですけど、外国人はいつも外の人と感

じている。しかし、日本人は外人に対して実に親切に、丁寧に対応しますね。外人さんを招いた人は、例えばわが家ではお茶漬けを食べても外人さんが来たら天井をご馳走するとかですね。とにかく我々と違ったお客様というのは大事なんだという意味で。あくまでも同じ土俵の上で話し合っているんじゃないかと、お客様ですから帰ったらそれでおしまいと、そういう感じになるわけです。

これもさっき申し上げた文献を通して異文化を理解する。文献というのは結果、記号の世界ですから、その記号と現実の間ですね、往復運動というのはほとんど無いままにそれでもって理解したと考える。

例えば日本人は、私は旧制中学だったものですから、いわゆる孔子なんかを暗唱させられるわけですね。ところがあれを日本語で読むわけですよ。中国語の発音ではないわけです。日本人はそれを素晴らしい世界だと思っているけど、たとえば中国人が読む唐詩と私

が日本語として読んだ唐詩は全然違うと思う。にもかかわらず、日本人は非常に唐詩が好きですね。そこにはズレがあるのですが、そのズレをどうしても感じる事が出来ない。

先ほど言った中国に行ったら目が曇ると言った先生の気持ちは私はよくわかるんですね。つまり、その間にまったく触れ合いがないという点が問題があるんじゃないかなというふうに思います。

それならば日本に来ている外国人、日本と触れ合う外国人と日本がどういう形でヒューマンネットワークを構築しているんだろうかを考えて見ましょう。フジモリ大統領というペルーの大統領が日本にお出でになりましたね。フジモリさんが来た時の新聞報道を見ていますと、フジモリさんが例えばお茶漬けを食べたとか、たくわんを食べたとかいうことを書くわけですね。おかしな話なんですよ。フジモリさんは食べていないのかも知れないけど、食べてくれるといいな、なぜなら彼は日本人だからと。フジモリさんというのはペルー人ですね。日本人じゃないわけですよ。だけど、日本人として理解してしまう。

今、日本にはずいぶんたくさんブラジルとかあちこちからたくさん外国人が入ってきています。浜松でこの前シンポジウムがありまして、呼ばれて行った時につくづく思ったのですが、浜松でもですね、なかなか触れ合いが出来ない。たくさん浜松に入っている人はほとんど日系人なんですよ。で、これはおかしなのは日系人のほうがビザを出しやすい。ということはおそらくお役所の方では、日系人は日本人だから外国人とは違うという発想があると思うんで、日系人はペルー人であったりブラジル人であったりするのに我々はそう理解しない。

日系じゃない人はどうかと言いますと、大朝撲がいい例ですが、なんかこう日本的な行動をしてくれるとやっとなんか仲間にしてくれる。朝青龍がちょっと日本的じゃないという、バッシングを始めるわけですね。だから要するに身近に感じるためにはその人を日本人にしてしまう、日本人に同化することによって初めて触れ合うという、そういう問題があるわけなんです。ところが、我々やっぱり個人個人の価値観もありますし、民族としての価値観の違いはたくさんあるわけですから、本当にそれを理解しないことには、例えばインド人に向かって、「イエス」という時にはクビを横に振らないで、縦に振りなさいよと言っても、「わかりました」とクビを横に振るわけですね。そういうのはやっぱり具合が悪い。そういう意味で本当の意味での人間を理解するためには相手の価値観というのをやはり理解して、そしてその価値観をえぐり出した上でその奥にある人間と触れ合うことが大事だと思います。無理やり日本的な価値観に引き込んで理解しようとするのではなくて、相手の価値観、違った価値観というものを認めた上で、じゃあインドではやはりクビを横に振るんだと、それであるインド人と人間的に触れ合っていく。その時に、縦に振らなければ付き合っただけあげないよというのでは、これは本当の意味でのヒューマンネットワークはできないわけですね。

そういう意味で、私は価値観の相違というのは、意外と無視されている。日本国内でも私は東京の人間だけど京都に長いことおりましたね、やはり京都の文化と東京の文化は違いますね。お雑煮にしてもお味噌にするか醤油にするかという違いがあるように、価値観の違い、文化の違いというのはあるわけですね。

れども、「ヒューマンネットワークを問う」というのが今日のテーマですけれども、ヒューマンネットワークのベースには人間の理解というのが必要で、その人間というのは真空の存在じゃなくである種の価値観を持っているわけですね。ですからもしも将棋を指そうと言ったら、将棋のルールがあるわけです。相手がいくらうまくてもチェスのルールではまずいわけですね。もしも相手がチェスのルールでいったら歩は斜めにしか行かない。おかしいじゃないかと、歩は真っ直ぐ進むもんだよといっても、チェスでは斜めに行くんだよと。ですからチェスをやる時にはチェスのルールで、将棋をやる時には将棋のルールで。そう考えないといけない。その違いというのを考えないと、本当の意味での触れ合いはできない。

ところが日本人はどうもやはり人間関係というもので、外国から来る人と触れ合うことが少なかった。外国人に非常に関心を持っているんですけど全部文献ですね。我々が中学の時に勉強した英語ですけど、一番大事なのは英語を日本語に訳すということですね。英語で自分の意思を表現しようなんてことはいっさい教えてくれないです。で、書くとすると英作文とか言って全然違ったことをする。ところが本当は相手の言うことがわかって、そしてそれを口頭で言い返して、それからモノを読んだり書いたりする。そっちの方向にいかなければいけないんですけど、日本はまだ文献を読む、英文和訳ということが日本の英語教育の基本になっているわけですね。これではやはり言語が持っている機能というのをほとんど無視してしまっている。

したがって外国に行きますと、例えばフランス語が読めますかと言うことは、フランス

語が話せますか、ということなんです。ところが日本人はフランス語は読めますが話せませんというと、向こうは不思議な顔をするわけですね。だけど、日本の学校教育ではフランス語はまず読むことから始める。英語も何語でも読むことから始める。読むとことというのは全部受け身なわけですね。だからこち



らから何かを発進して、そこに交わるということができないわけです。

その意味で価値観の問題というのは非常に大事な問題だと思うんですが、今日のテーマにかえて言うと、日本で留学をされた方々、日本語の能力も高く非常にお上手ですね。ずいぶんがんばってやっておられる。日本のことも知っておられる。韓国の方であったり、タイの方であったり、シンガポールの方であったり、ベトナムの方であったりするわけです。で、留学生はその意味での非常に大事な文化の翻訳者だと私は思っているわけです。それは我々にはわからない、それは本当に留学して何年間か日本語が上手になるまでにずいぶん苦労されたと思うんですが、それは単に日本語というものを学ぶだけじゃなくて、日本的なものの考え方というのをずいぶん頑張って学ばれたと思うんですね。私はむしろそういう人の体験を日本人にフィードバックしていただきたい。そして、日本人は実はさっき言ったようにカプセルの中に入ったり、宇宙服を着て外国に行くんじゃなくて、外国に行ったらその国の人と、人間として触れ合える。そういうチャンネルを作るべく努力しないと、国際化、国際化と非常に上滑りしてることに

なる。その意味で今日の「アジアのヒューマンネットワークを問う」という題は私は非常に良い題だと思います。国際化と簡単に言っても、ヒューマンネットワークまではなかなか結びつかない。国際化ということは日本人が外国に行くことではないんだと。あるいは外国から単にお客様が来るわけではないんだと。本当の意味で国際化というのは、そこに人間としての触れ合いが出来る。つまり、ヒューマンネットワークが出来るということで、それは日本人は学ぶ機会が非常に少なくなっている。中学から高等学校から大学に行ってもですね、なかなか出来ない。だからよく言われるように日本人が一番上手い英語は「I don't speak English」だと。「I don't speak English」といって相手との対話の窓口を閉じてしまうわけですね。

ところがヨーロッパなんか行っていると、ほとんど二言か三言しか知らない人なのに一生懸命喋っている。日本人の場合は大学の偉い先生でも何か聞かれると「I don't speak English」。それでニコニコしているわけですね。何だろうこの人は？全然ネットワークが出来ない。ですからその意味で私は今日はぜひ日本に留学されて日本語をマスターされ、そし

**金 榮作 (キム ヨンジャク、韓国)**

法政大学客員教授、国民大学名誉教授。元現代日本学会会長。第12代国会議員。旭日中綬章受賞。著書『韓末ナショナリズムの研究』、『21世紀韓日関係』など多数。

て日本文化をマスターされながら韓国人であったり、中国人であったり、シンガポール人であったり、タイ人であったり、ベトナム人である、今日の元留学生の方々からですね、日本人の持っている問題点を、ぜひ教えていただきたいというのが、私の基本的な話してございます。

一応そういうことで、発題の話しということで、時間をなるべくみなさんにたくさん喋ってもらいたいので、私の持ち時間はあと12分あるんですけど、むしろみなさんに喋ってもらったほうがいいと思うので、私はこれで。どうもありがとうございました。

(工藤) 石井先生、ありがとうございました。それでは、キムヨンジャク先生の司会進行に

お任せしまして、スピーカーの方々の発言をお願いしたいと思います。キム先生お願いします。

(キム) 韓国から参りましたキムヨンジャク(金榮作)です。日本に滞在してもうかなり長い年月になりますが、私の名前を韓国語の発音で紹介される機会は、数えられるくらい少なかったと思います。これは基本的には私の責任ですが、私の名前が良過ぎた？ことに問題があったと思います。私の名前は日本式に読むとキンエイサク。日本の元首相佐藤榮作と同じ名で、ちょうど私が日本に留学していたころ、佐藤首相が現役でした。自分を紹介する時、キムヨンジャクと紹介するとなかなか覚えてくれないし、私が自己紹介する前に日本の先生や友人達は、日本式にエイサクさん、エイサクさんと呼んでいました。しかし、最近は日本式にエイサクという名前で紹介されると違和感があり、できるだけ、キムヨンジャクという韓国名で紹介させてもらいます。

私は自分の名前の呼ばれ方ひとつにも時代の変化を感じているわけです。同じアジア人でも、例えば中国人、日本人、朝鮮人、韓国人は、漢字文化圏に属していて、幸か不幸か漢字をそれぞれの国の言葉で使っているから、韓国語では韓国式漢字の読み方があって、私の名前は金榮作と書いてキムヨンジャクと読むわけですが、日本ではその漢字だけ書いておくと、みんなおのずと日本式にキンエイサクと読んでしまう。中国に行くと、チンロンチュオということになる。では、ロンチュオ、エイサク、ヨンジャク、どれが私の名前か？実態のあるアイデンティフィケーションから言うと、ヨンジャクというのだけが、私の名前です。

私は以前、明治時代の伊藤博文、それはハクブンと読むのが正しいのかヒロブミと読むのが正しいのかについて専門家に聞いたら、親しい人はハクブンとも呼んだでしょうけれど、普通はヒロブミと呼んでいたとのことでした。それで私は、日本人でも同じ日本人の名前を違った形で呼ぶ慣例があることを知りました。

私はこれも、今日、私たちが話題にする東アジアの共通文化、そしてその共通文化で何が共通していて、何が異なるのかを再確認することから東アジアの新たな時代、そのありかたを作り上げる土台にすべきではないかと思っています。

これから4人の今日のパネリスト達に、順番に、石井先生のお話を受けてのコメントでもいいですし、それと直接関係がなくても、日本に長く滞在なさった方々ですので、それぞれご自分の体験から、現在の日本と自国との関係等について発言していただきたいと思っています。

最初にひとつ私がお願いしたいのは、お一人であり長くお話しをなさると、4人が1回ずつ話すだけでも時間が過ぎてしまうので、できるだけ要点をまとめ問題提起として手短かに発言してください。こういった形で発言回数を出来るだけ増やして、前半の1時間半の中でもできるだけお一人が2～3回発言が出来るように会議を進行させていただきたいと思っていますので、ご協力お願いいたします。それでは、まずイッティさんから、お話しください。

(イッティ) タイから参りましたイッティと申します。今日は大変懐かしい顔のお友達と再会するだけでも大変嬉しく思っています。

後でご挨拶を個別にさせていただきます。

資料を用意しましたのでスクリーンを見ながら説明させていただきます。

僕はちょうど30年前に日本に来まして、学生で10年、その後研究者で9年、そして1996年にタイに帰りまして、2006年にまた日本に戻って来ました。

仕事、勉強においてはずっと研究だったのですが、この3年は自分でも予想しなかった商社というところに入りまして今仕事をしています。本日のテーマを与えられて今もまだ考え中ですが、なぜ今ここに自分がいるのだろうかということとも関係しますので、その話しをさせていただければと思っております。

僕が日本に来た時(1978年)はアジアやタイはまだ、今も、弱い国で、当時自分の意識も日本に留学させていただいた、まあ奨学金をもらってきたのは、途上国への日本の支援という意識が強かったです。留学中は、新星学寮に入ったり、アジア文化会館に出入りしたり、穂積先生の精神に触れたりという時代背景があったと思います。しかし今は昔と状況が違ってきて、ある国がある国を支援するという要素はありますが、僕の今の仕事ですが、まさに国際的な人材獲得競争の時代に入ったわけです。2020年に30万人留学生という状況は、まさに今我々は、そういう違う局面に入っているかと思えます。

表1の2つ目のところですが、日本に来ていろいろなことを勉強できたのですが、一番感心したのは日本の統計の良さです。なんでも統計と平均が取られているところですね。日本では統計で毎年平均年齢が発表されます。僕もそれを見て約20年前からタイの平均年齢はどうだろうと。それ以来僕もタイの人口に、デモグラフィーですね、興味がありまして、

(Mr. Itti 表1)

- これからは国際的な人材獲得競争
- アジアには高齢化とそうでない国があり、状況が違う。2020年は中国、韓国、タイ等も結構高齢社会
- 2020年留学生30万人。30拠点大学。1万人留学生/大学!大丈夫ですか? 「英語でも日本留学OK」の違和感はどう理解すればいい?
- グローバル化で同一職業は実質同一賃金の傾向
- 企業・会社だけが決め手ではない
- 働きやすさ、住みやすさ(子育て、教育、医療)、環境等が決め手
- 国際結婚が有効な手段?
- 日本ファン=? 日本はものや製品ではなくもっと「日本人」を売りにすべき愛され、尊敬される対象は人
- ものの豊かさ追求の終焉。精神的な豊かさが決め手

タイの平均年齢とか出生率などを追いかけて、わかったことは、タイも高齢化に向かっている国の一つだということです。最近、アジアの半分くらいの国が高齢化に向かっています。日本の今の状況は、実はアジアの10年、20年、あるいは30年後に、同じことが発生すると。

従って、人の奪い合い、頭脳の奪い合いと同時に高齢化は各国が直面していくと。

今回日本が打ち出した2020年の留学生30万人計画ですが、僕が学生の間は10万人の目標でもかなり苦勞されていた、僕もその中にいましたが、関係者は大変苦勞され結局達成されて、今日の様相になったと思います。しかし今は世界的にも、アメリカはもっと積極的に人を集めているところからしても、2020年に30万人というのは日本の観点からも必然的な政策の出し方かなあとは思います。

ただ、今日いろんなところの関係者が来っていますが、30の拠点大学で30万人、つまり一つの日本の拠点大学で1万人の留学生というのは、かなり大変なんじゃないかなと。

今、一番多くの留学生を受入れているのはたぶん東京大学ですね。それでもおそらく全

体で3000人、4000人なので、一つの大学で1万人の留学生というのはどういう状況になるかなあという懸念が一つあります。

あとは、日本語が難しいので、日本に留学しても英語だけで勉強でき、卒業まで見込めるというような政策も採用されようと、あるいは既に実行されてい

ますが、この辺は何が何でも数だけ増やそうという違和感がありますね。どう理解すればよいかというのが一つあります。

もう一つ、僕が1996年にタイに帰った時のオファーとしては、タイの政府機関ですけども、日本でもらっている給料と同じ給料を出しますから、帰ってくださいというように、実は今、同じ仕事だったら世界中どこに行っても、実質同じお金をもらえる時代になりつつありますね。だから、給料で日本が人を引っぱるとするのは、なかなか難しい時代に入っているだろうというのが、僕の思うところでは。

もう一つは、今自分は日本で民間の会社に入って3年目ですが、もちろん日本のモノづくりのレベルの高さは疑う余地の無いところですが、仕事の環境としては、これで人を集められるかということ、僕はまだ疑問があると。つまり留学生を採用してそのまま日本に残って、日本の産業の力になってもらうという発想での日本企業の魅力というのは、それだけではまだちょっと足りないというのがあります。

自分が留学で日本に来て、タイに10年戻って、また日本に戻ってきた理由を考えてみますと、表1にある通り働きやすさ、住みやすさ、これは子どもが出来るまでとは全然発想が違って来たんですね。子どもができると、子育てのしやすさというのが、親としては、非常にいろんな困難を乗り越えてでもこれは大事なことがよく自分でわかりました。

また、教育ですね。医療、タイは、医療はそこそこ悪くはありませんが、子育て、教育のところが大きいかと。そして環境、ここで言う環境とは本当の環境ですね。緑、空気、人、時間、その他。だから給料ではない。会社ではない。このところが大事ですね。自分はそうのように思っています。

で、日本はその魅力があるかどうかが大変なところですが、自分の考えではあると思っています。そこを売りにしてやったらいいかなあと。

もう一つは、いろんなことを言っても人は動き回るので、例えば、僕もそうですが、ここにいるフーさんもそうですが、国際結婚が一つの決め手です。もう選択の余地がなくなるんですね(笑)。こういうところが結局は大事なかなあと。例えば日本の大変優秀なみなさんもタイに行って、タイの人と結婚して向こうに残っている人も多いですね。それで活躍されていらっしゃる。そういうのも一つの、これからの世界にいいかなあとと思います。

結局、経済の力とかでは、人は引っぱれないことがありますので、次に、気持ちの面を見てみるとですね、結局のところ日本ファンを作りましょうと。日本ファンを増やしましょうということ。というのは、例えば僕が10年タイに帰っていたとき一番悔しいのは、日本の製品はけっこう評判がいいのですが、



Itti Rittaporn (イッティ リッターボン、タイ)

1978年文部省国費留学生で来日。東京大学工学部物理学博士(超電導)。タイ国立電子・コンピューター技術センター(NECTEC)副所長、2006年再来日、民間企業で新規ビジネス開発担当。

ただ、日本の凄さ、良さというのはタイ人には全然わかってない。そういうところが悔しいというか、結局モノしか見ていないんですね。人間は浅いところがありまして、感心はするけれど、本当にそれを作った日本人の良さはですね、世界は知らんというところがあります。

これはお世辞を言っているのではなくて、日本の悪いところはいっぱいある。だけど日本のいいところは世界は知らない。これから日本観を作るというのは、僕はそういう製品とかモノじゃなくて、日本人そのものが、もうちょっと知られたら大変いいかなあと 생각합니다。いいところも悪いところも。結局、愛されて、尊敬されるのは本当は人なんです。人で売れなかったらどこの社会でも売れない、

(Mr. Itti 表2)

2020 - 2030年の日本の国際化とは？

	中国	韓国	台湾	ベトナム	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール
高齢化								
人口の増減								
国の国際競争(低いほど定着)								
工業レベル(低いほど日本に定着)								
農業レベル(低いほど動員できる)								
文化類似・親和性								
理系職業								
文系職業								
日本語								
冒險志向(外国暮らしは苦でない)								
サービス(ローテク分野)								
サービス(ハイテク分野)								

※グレーの多い国ほど日本に定着する？

というのはあります。

次に表2で、「2020年、2030年の日本の国際化」を考えてみました。世界の人口が70億、80億、100億になった時に、今までの日本や先進国のようにモノの豊かさを追求する世界はあり得ない、そうはいかないというのが考えられます。したがって、将来もし世界中からいろんな人が日本に集まってきても、ものの豊かさの追求ではなく、いいものを考えたり、作ったり、大変健康な社会を作っていく形が実現すれば、そういう豊かさを求める人がやって来るようになるかと思います。

日本にいたら癒される、ホッとする、いいことが考えられる、いいものが作れる、いい家族、子育てが出来るとかですね。実は北欧の国々を見ると、そういう環境が出来上がっているところがあってですね、日本は高齢化、人口が頭打ち、減っていく一方で、これからの日本は外国人があまり混ざってこない社会でやっていけるかということ、なかなか難しいところがありますよね。そこで、人と日本の良いところを売りに出せば、30万人と言わず世界から日本の良さを活かして、日本と溶け込める人はいくらでも集まるのではないかと

思います。

そうすると、積極的にそういう政策を作っていかなければいけないかなと思うわけです。自分もこのところのコミットメントとしては、当分日本にいないといけない、あるいはいいことをしたい。そうした中で、自分のテーマとしても考えていますので、ぜひみなさんとも、留学生30万人、何万人かは知りませんが、いい方向に持っていけたらなあと思います。

表2は、まだ考えかけですが、後でディスカッションの時に話せればと思います。横軸がいろんな国ですね。今日、今座っている順は年齢順ですが、その表の順番は日本からの距離の順番でいたい並べてあります。韓国が一番近いですね。中国、韓国、台湾、ベトナム、インドネシア、タイ、マレーシア、シンガポール、すみませんフィリピンを入れて無かったですね。この中で縦方向はいろんな要素があって、色の付いたところは実は日本との協調性が高い、という気がしているところですね。で、色の付いたところが多い国ほど、これから日本と補完的に、一緒にやったらいいのではないかと考えてみましたので、また後でディス

カッションさせていただきたいと思います。

ありがとうございました。

(キム) イッティさんの今の話は非常に面白い話でした。同じアジアでも、それぞれの国の歴史的關係からして、感じる度合いが違っているところがあると思います。その点も又討論の話題にすると面白いのではないかと思います。

それでは、次の先生お願いします。

(呂) 中国からかれこれ20年前に来日した呂です。私は日本に来てから東京大学大学院で5年間くらい学生生活を満喫していました。お金はなかったのですが、生協(コープ)の中に本屋があって、そこで書評を書くアルバイトをしていたのですが、そうすると毎週本を評論する会議があって、そこで弁当をただでもらえた。また、スキーも招待されるんですね。そういうことで、毎年冬になるとコープのお金でスキーに行けたんです。でも、実は、幸せな生活はそこまでだったんです。

ところで、日本に来る前は、私はずいぶんアウトサイダーでした。母の生家は本来は金持ちの家だったのですが、毛沢東の革命で一気に一番貧乏な家になってしまった。そして、父は共産党の幹部でしたが、上層部に仕事の改善すべき点を指摘したら、レッテルを貼られたんですね。右翼とか、…。

その上、私は農民による再教育を受けるべしとして、17歳の時に田舎に送られ、色んな農作業を経験しましたが、いつも、“悪い家庭に生まれたが、教育したらなんとか使いものになるだろう”というレッテルが張られたままですね。色んなことをやっても、どんなに頑張っても、結局は出世できる部類に入ら



呂 新一(ロ シンイチ、中国・江蘇省)

1983年中国政府奨学生として来日、東京大学大学院工学博士(システム工学、エネルギー経済)。中国、日本、アメリカの証券会社、銀行等数社に勤務。現在、金融コンサルタント。

ないし、共産党にも入党できず、他人よりもずっと下ということで、殆ど、アンタッチャブルみたいでした。

日本に来てようやく、顔は日本人と変わらないので、何とか芽が出たというか。大学院の2年生の時、「呂くんというのは日本人と変わらず優秀ですよ」とほめられました(笑)。「日本人と変わらず」ということが、優秀の度合いの代名詞なんですね。

その後アメリカに行って、それから日本に戻ったんですが、日本の外資系証券会社、2社に勤めて、あと日本の大銀行、1、2位を争う銀行で、ずっと契約社員として勤め、つい最近辞めたんです。

その間もアウトサイダーでしたね。どうしてアウトサイダーかというところでですね、まず昇

進は関係ない。昇進昇格ですね。どんなことをやっても、昇格は関係ないということです。これは契約社員だからということですね。組織外の人、ずーっと、そういうことをやってきた。

ですから、もしこの会場に外国人がいて、日本の会社に入るという人がいれば、二つのアドバイスをしたいと思います。一つは、日本の会社で外国人が出世を求めるのならば、40才止まりですよということ。これは日本の文化の一つで年功序列から来ることです。どうしてかと言うと、年上の部下は持ちたがらないからですね。一方、外国人は40歳になると出世はまず出来ない。けれども上のほうの日本人はどんどん若返って自分だけ年を取る。そうすると40代以降は日本の会社では、居場所がなくなると言うことです。もちろん大学などの研究職は大丈夫でしょうけれど、公務員もね。でも普通の会社にはいるとそういうことになる。

もう一つは契約社員としての給料についてですね、僕の場合は金融だったので、業績に応じてボーナスもらえますけれど、殆どの方はそうではない。日本の大企業では、ボーナスはほとんど同じですからね。しかし、僕の場合、逆に、パフォーマンスが悪いとあまりもらえないですね。業績が良い時にはもらえても、今度リストラがきたら、真っ先にその対象になったりする。

こういった人たち、契約社員というのは退職金は0、厚生福祉は期待できない、保障もない。だから、いつ放り出されて、野良猫みたいな生活になるのかを覚悟しなければならない。そういう意味では、いろいろ覚悟をして、やって下さいということですよ。

逆に、日本の企業の方に言いたいことは、

日本で外国人を雇うというのは、彼らが優秀でなければ、たぶん雇わないですね。しかし、何かをクリアしてなかったら、外国人は日本には来れませんから、彼らには何かがあるんですね。

でも、そこで自分たちと同じようなことを求めたら、意味がないんです。日本人というのは、非常に細かいところに目がいく、これが工業製品の高さにつながっていますが、逆にそれで人間に対しても細かいところに目がいってしまう。すると、外国人の違うところを見てしまって、気に食わないということになる。そうすると、実は意味がなくなっちゃうんですね。それだったら東京大学に行って、優等生だけを引っぱってきて、模範解答を出してもらえばそれでいいじゃないかということになっちゃうんですね。

そういう意味では外国人の良さを殺さないためには、別に国際交流とか言ってね、中国人は餃子を食べるとかそういうことを知らなくても全然いいんです。一番大事なのは「異を捨てて同をとる」ということで、中国の諺にあるように、同を求めて異を存在させる、認める、ということですね。外国人を雇って国際的な大きなことを狙うんだったら、小さいことにはこだわらないことですね。

何でもそうです。大きなことをやるには大きな目標を立てることです。それを、今日、布団を外に干ほしてきたことを気にして、大事な会議なのに雨が降るんじゃないかと帰っているというのでは、大事なことが前に進みませんよね。日本人にはそれを言いたいです。

もう一度、外国人のことに戻りますと、日本企業に勤めている以上は、ある程度寂しさを覚悟しないとイケない。というのは文化の背景を全く知らないから。僕が会った日本人

は、お昼に何を喋るかという、だいたい野球ですね。あとは社内の人事異動、誰がどこに行き誰がどこに来るとか。外国人のあなたは殆ど知らないし、知ってもまったく意味ない。そうするともう蚊帳の外に置かれるんですね。そこで寂しさを覚悟しないといけない。ここで就職する以上はですね。

もう一つは、あんまり感情的にならないこと。僕はしょっちゅう感情的になるんですけども、中国に関係する出来事では絶対感情的にならないです。実は。

というのは、私は中国から、イッティさんはタイから、アンさんはベトナムから来ていますが、自分は自分の国のことを良く知っているつもりでいるんですね。そこに、また感情移入があって、国を離れると、自分の国をどんどんかわいがっちゃう。そして他の国の人から自分の国の批判を言われるとカッとなっちゃう。平常心で客観視できないんですね。

自分が年をとって、色々経験するとだんだん小さい頃の教育の影響が薄れて、ものを客観的にわかるようになるんですね。だから、インド人だからインドのことがよくわかるということはないんです。そのままだと非常に間違いで危険です。外からいろいろ叩かれて成長するということですね。

最後にもう一つ言いますと、ヒューマンネットワークについてです。タイトルを見た時に思ったんです。人間の一番美しいことは助け合うことで、これ非常に大事です。ただし、もっと詳しく見ると、人間というのは心が響き合っていて、本当に助け合わないとダメです。本当に心が響き合うと、その人が何を大事にしているか分るんです。その人が目標を達成するの



に、私もぜひ一肌脱いで頑張ってサポートしてあげたいという風に。そういう意味では、人間というのは、何を大事にしているかということをお互いに見極めるんですね。それは日本にいてもあるいはブッシュの国、どこにいてもそうです。とにかく世の中を良くするのに何を一番大事にするかということ。

それに関連して去年の12月、前にいた大手銀行で差別に反対する標語をみんなから募集したんですね。僕の同僚は何を書いたかという、「あなたの差別行動を、子どもが見てる、奥さんが見てる。」というのが多かったです。誰か見てるというのがだいたい人の発想でした。僕自身が書いたのは、「他人への差別は自分への詐欺である」と。どうして自分への詐欺かということ、自分は他人より上とって自分を騙しているから。それは、自分の気分を良くしているだけで、実は自分が他人より上ということはないんですね。

そこに日本と中国文化の違いがあるというヒントを得たんです。要するに日本人というのは誰かに見られること、世間様が物凄く大きい。中国人は、ある意味で、自然中心主義。自然に逆らってはいけないと。中国ではよく引用されるんですね。「何か悪いことをしたら

天は見ているぞ」と。そういう意味では、中国ではお天道様に怒られちゃうとめっちゃくちゃなことになります。

日本では、みんなが同じことをやったらこわくない。日本人というのはお互いの監視で成り立っている。だから、同じ方向に走ったら監視による牽制がなくなり、危ない。中国では自然の摂理に違反したら危ないということになるわけです。

それと関連して言うと、アメリカでは法です。米中日、この3つの大きな影響力のある国は文化が全然違う。だから彼らが大事にしているものも違う。大事にしているものが違うとわかると、ある程度、企業の行動や思考、人間の思考もわかります。それが予測できると、予想外のことが起こっても、人間関係が壊れるとか、物事が運ばなくなるとか、これは防げますね。

(キム) ロ(呂)さんは中国の発音ではなんと言いますか。僕は韓国式で紹介されましたが、ロさんは日本式で紹介され……。まあいいことにして、中国に行ったら中国式で発音することにして、次、フー(符)さんにお名前を中国語で発音していただくことから、始めましょう。

(符) シンガポール出身のフー・チューウェイ(符祝慧)です。私は呂さんとイッティさんとはだいたい同じ時期、80年代に、アジア文化会館にお世話になり、その寮に住んでいました。ですから今日の会は私にとってはパネルディスカッションというよりは同窓会のようなものです。また、会場にはたくさん知っている顔がみえますので、今日の話はとても気楽な気分で行きたいです。

私は日本の大学を卒業した後、ずっとテレビ、新聞関係のいわゆるジャーナリストという道を歩んで今日まで来ました。ここまで来られたのは、日本留学とアジア文化会館のおかげだと思っています。最初は、ドラマ制作などを勉強するつもりで日本の大学に入り、映像を中心に学ぼうと思っていました。しかし、その後、日本社会を見て、日本人と付き合っ、またアジア文化会館と私が付き合っている日本社会がなぜ違うのか、という問題意識から大学卒業の時にドキュメンタリーを作りました。その後帰国して、シンガポールの国営放送に入ったんです。

今日、特にこういう場で、留学生の皆さんもいますので言いますと、自分が留学して勉強したいことは、あらかじめ決めてから来る人も多いと思いますが、ここ、日本を見るところもとても大事だということです。特に私の場合、特派員として日本を知らないとい私は仕事にはならないんです。

ここで、ちょっと気分転換に、私が3年前に作ったビデオを2分間だけ見ていただき、どういう仕事をしているのかを紹介したいと思います。

ビデオ放映……

(符) このビデオをアジア学生文化協会の主催者に渡したのは水曜日です。その次の週にインドでテロと言われるような事件が起きました。私の留学の時を考えると円高も大変進んでいます。私自身が、たぶん呂さんやイッティさんも同じ経験をしていると思いますが、日本は何でもとっても高いという印象でした。当時はまだ、留学生は10万人はいなかったのですが、これから30万人を受けれる計画が

あるとのことですね。最近の円高で本当にその数字に達するかどうか、わかりません。先ほど呂さんがおっしゃったように、呂さんは日本で仕事をしていますし、私は結婚と仕事を兼ねて日本に住んでいるのですが、80年代に比べると周りの外国人はすごく多様化しているんですね。私の周りにも、子育ての時には国際結婚という人たちがたくさんそばにいて、言葉もできないのに子育てをしたりして日本に居る。また最近の日本では、介護の人たちが足りないので、インドネシアやフィリピンからどんどん来るようになってきている。そういう留学生とは違う外国人も私たちの仲間になってきました。今30万人を目標としている留学生は、将来、政策としても100万人を超えることになるのではないかと思います。

ただ、一つ気になりますのは、先ほど呂さんやイッティさんが問題提起をして、また最初に石井先生もおっしゃったように、この日本とどう付き合うのかという問題です。今私は、日本に来てから25年目になります。最初に日本に来たのは1983年です。じゃあ今の日本と私が大学の時の日本は変わったかと言うと、私は変わってないと言っています。私より更に20年前に日本に留学した大先輩がいます、今大学の教授になっているのですが、彼もジャーナリストの一人です。彼も20年間に書いた文章はほとんど同じだと言っています。

今私が書いている文章の内容も、だいたい彼が当時書いたものと似ている部分が多いんですね。ということは、日本は変わっていない。更に遡っていくと、実は日本に住んでいる外国人は、私たち留学生が最初ではないんですね。もともとここに住んでいた在日韓国人、華僑の人たちがいます。しかし、外国人



符 祝慧（フー チューウエイ、シンガポール）

1983年日本留学。日本大学芸術学部放送学科卒業。シンガポール国営放送ディレクター、東京放送等を経て、現在シンガポール・プレスホールディング『聯合早報』東京特派員。日本人と結婚、日本で子育てをしながら東京大学大学院情報学環修士卒。

に対する不平等は戦前から戦後まであまり改善していないのではないかと私は思います。

また後ほど皆さんとそこを議論したいと思っています。ありがとうございました。

(キム) 次にダオさんの話しを聞いて、その後討論に入りたいと思います。

(アン) 初めまして。ベトナムのアンです。名前はダオ・ユイ・アンで、名字はダオですが、ベトナムでは名前前で呼んでいて、短くて覚えやすいかなと思ってずっとこの名前を日本でも使っております。

このスピーカーの中では一番若いと思いますが、今30歳です。というわけで、ちょっと

生意気な発言も許されるだろうと聞き直って、話をしたいと思います。

少し自己紹介をいたしますと、私は1998年に日本に来日しました。そのきっかけはABKの先輩でもあります、ホエ先生（グエン・ドク・ホエ氏）です。先生は去年のABKのシンポジウムのスピーカーとして出席されています。ホエ先生のドンズー留学プログラムによって、1998年来日して、その後東京大学の建築学科の修士課程を出て、2006年に設計事務所に入りました。建築関係の仕事をしています。

私たちを日本に送り出した時のホエ先生の言葉は、今でも忘れられないです。「日本は地獄です」と。「日本に行ってちゃんと生きて帰ってきたやつは人になれます」と。今、毎日の残業でちょっと死にかけていますけど。（笑）

そのことがずっと今でも頭の中残っています。だから今私は日本で日本企業に勤めていますが、ずっと日本に留まるつもりはありません。近い将来ベトナムに帰って仕事をやりたいと思っています。

日本に来て凄く感心したのは、日本人の仕事に対する思いですね。仕事は、身を削ってでも完成させるという思いです。だからそれが裏目に出て頑張り過ぎて過労死という問題もあるのですが、そういう残業の文化は、文化という言葉を使わせていただきますけど、他の国では、少なくともベトナムではありません。定時になったらみんな、べろべろになるまで飲んで、家に帰っていきます。

そういう文化の違いを乗り越えて、日本に定着させられるかということですね。「定着」というのは留学生30万人計画の中で使われている言葉なのですが、私が思うには、留学生は全て日本で就職させる必要はありません。留学生は自国で活躍することこそ、日本の宣伝になり

ますし、日本の国際的な立場も上がると思います。留学生の日本だけでのステージを準備しても、あまり意味がないと思います。

また、外国から労働力を入れる前にニートの問題を解決した方がいいと思います。家族の中の子供を遊ばせておいて、外の人に働いてもらって家を支えてもらう話になりますので、普通あまり長持ちしない話ではないかというふうに感じます。

30万人の留学生受入れの話に関連してですが、将来受入れる留学生のことより、今まで日本に来ている留学生の受入体制の見直しを行った方がいいのではないかと思います。問題は、留学の質ですね。今まで日本に留学している人たちのネットワークを構築し、その人脈を生かして、メンバー各自の交流・ビジネスのチャンスを広げるシステムにしていけば、必ず日本留学が魅力やメリットのあるモノだと人々が受け止めるでしょう。そうやって初めて日本が好きになって日本に行きたい人が増えるのではないかと思います。

外国人とうまく交流するには、もちろん日本人の方はもうちょっとオープンになっていかなければいけないと思います。この間の新聞を読みますと、観光客が増えている事に対して5割くらいの日本の方が不安を感じているという記事がありましたが、それなら長く滞在する留学生たちが周りに居たらなおさら不安になるんじゃないかと思います。

逆に留学生自身も積極的に、先ほども石井先生のお話にもありましたけど、自分たちも積極的に地元の人たちと交流を持たないと、同じ結果になります。僕の出身であるドンズー留学生が、僕が来た時はたぶん200人ほどでしたけど、今は800人くらいになってますね。そうすると後輩の顔も知らないくらい数が多

いんです。そうした中でみんなよく団結してお互いを助け合っているのですが、それを見ていると少し不安になるんです。彼らは彼らの中だけで物事を解決してしまうと、結局日本人との関わりというか関係が生まれません。問題は日本人だけじゃなくて、留学生のほうにもあるというふうに感じます。

日本は「ワ」を大事にするという国なのですが、「ワ」というのは和平の「和」でもありますし、丸の「輪」でもあるのです。ただ、その「輪」を守り過ぎると、その「輪」の中のものしか成り立たないのです。その「輪」をどこかで切っておかないと、外からの要素が入って来ない、人が入って来ない、つまり外との交流が成立しないということになりますので、「輪」を大事にし過ぎないということです。心をオープンにしていけないと国際化とか、ヒューマンネットワークを構築することは難しいのではないかと思います。

以上です。

(キム) どうもありがとうございました。それぞれの先生方からいろいろ貴重なご意見を伺いました。休憩後、後半において、できるだけ今日の主題と関連づけてまとめてみたいと思います。

(工藤) それでは10分間休憩しまして、3時40分から再開したいと思います。

<休憩>

(キム) それでは第二部というか、第二セッションを始めたいと思います。討論に入る前にオーディエンスから前半部の発言に対するコメントや質問があれば出していただいて、



Dao Duy An

(ダオ ユイ アン、ベトナム・ダナン)

1998 年来日。東京大学工学部建築学科修士卒。

2004 年から日本で民間設計会社勤務。

該当する先生に発言していただくようにしたいと思います。

(聴衆1) カミシマといいます。東京の中野から来ました。仕事はしていません。石井先生にお尋ねしたいのですが、2020年に30万人の留学生を受入れるということですが、これは日本の国として費用を出すということですか。それともただ単に留学を希望して来る人を日本が許可するということですか。

(工藤) そのことについては事務局のほうからお答えさせていただきたいと思います。先ほどからしきりに「留学生30万人計画」という言葉が出ていますが、これは日本政府が今年(2008年)の夏に正式に打ち出した政策で、



工藤正司（財）アジア学生文化協会常務理事

現在15万人前後の留学生を2020年までに30万人まで受け入れを拡大するという方針なんです。これはとくに研究機関とか企業に、若手の労働者が枯渇してくるという予測の元にそういうところの研究者、ビジネスマンを補うために、優秀な留学生の受け入れを拡大しておかなければならない。こういう見込みの上で、日本政府が正式に打ち出している政策です。

（聴衆1） そうすると日本政府がいくらかお金を出すわけですね。

（工藤） まだ中身についてはいろいろありまして、でも30万人分の奨学金を出すわけではありません。ただ、いくぶんかの奨学金の増分は考えているようです。

（聴衆1） もう一つ、シンガポールの先生にお尋ねしたいと思います。さっき先生は日本人の意識は戦前から変わってないのではないかというお話がございましたね。私は違うと思います。この間見てみると、1923年の9月1日の関東大震災の時、朝鮮人、韓国人を大量に殺しましたよね。中国人も日本人が殺しました。私は1995年、神戸の大震災で一番心配したのはその再来が来ないかというこ

とを一番先に心配したんです。街が壊れて人が死ぬというよりも、民族蔑視といいますか、そのことに基づく虐殺が起きないかと。あそこにはたくさんの朝鮮人、韓国人、中国人、それから被差別部落の人がいますね。そこで弱者に対する暴行が起きないか。しかし、現実には全然起きませんでしたよね。やはり日本人は非常に変わっていますよ。戦前から戦後すぐくらいまでは、中国人のことを中国人と言った人はあまりないんです。みんなチャンコロと言いました。チャンコロとは中国人に対する蔑視ですよ。今は、そういうことを言う人はそんなにいないでしょう。非常に変わりましたよ。朝鮮人もセンジンと言っていました。そういう人も今はないし、非常に日本人の意識は変わってきていると思いますね。だてに歳月は流れてるんじゃないと思います。

（呂） 僕の方から一つだけ言わせてもらいますと、僕が接触した日本人ですけど、確かにだいぶ変わりました。日本に外国人が増えてきたということもありますし、日本の対外依存度が大幅増えたということだと思います。戦後の政策で輸出依存になったんですね、経済が。むしろ私が今心配しているのは、戦前を経験した年代の日本人ではなくて、今の若者、20代から30代のほうが逆に心配ですね。

というのは、50代、60代は歴史観を勉強されている。しかし、今の30代の方は、わりとバブルの時に大学が終わっているんですね。「ロンヤス時代」で高校生、大学が終わって、それから小泉さんとブッシュの関係とかです。実は、僕は銀行に勤めていて、50代以上の人にはだいたい中国の変化について聞かれるんですが、逆に30代の方からされる質問というのは、僕から見ると、侮辱的な質問が多いで

すね。中国からは、どうして悪いことばかり日本に来るんですかとか、全ての悪いことはどうして中国から出るんですか、とかです。僕はしょうがなく一つだけ答えました。「いや、エイズは中国ではないよ」と。それは精一杯の弁明です。

何を言いたいかというと、日本は物凄く二極分化していて、製造業とかの場所はどんどん国際的な交流が進んでいます。しかし、金融業とかは、自分たちでまとまってやっている、日本国内に止まっているようなところは、意識はそれほど変わっていない。特に、若者、歴史観の無い方は。

これをびっくりしないことです。今は本屋さんに行くと、アジアが悪いという論調の本がたくさん置いてあるんですね。反対に、『なんて素晴らしい国日本』、『底力のある国、日本』、麻生首相が書いたようなタイプの本が並んでいる。そういう意味では若者の歴史観は違う。

同じことが中国にも言えるんです。国粹主義者が今、急増殖中です。下手をすると、これまでの変化がダイナシに。

そういったところがいろいろあります。大きな関係で見ると、進歩していることは間違いないことです。

(符) さっき、戦前の日本と今の日本は変わっていませんと言ったのですが、唯一変わったことは、戦前の日本は民主主義が無かった、戦後は確かにあります。その点の日本は評価しています。

ただし、呂さんが言ったように歴史認識の問題がありますし、

最近の日本政府の留学生30万人計画や、インドネシアやフィリピンから積極的に外国人の看護師たちを日本に入れていますが、片一方では、例えば、有事法制、国民保護法とかの法律をつくり、国民だけを保護する。私たち外国人はどう保護されるのでしょうか？ さっき質問された方も言っていたように、震災の時にはたぶん外国人を殺すことはない、関東大震災のように毒を入れたというわさを流すこともないでしょう。ただ、私たち外国人がここにいる、日本の国民と同じように助けられるか、という点では、私の中にもまだまだ不安はあります。

私は外国人で、夫は日本人で、子どもは日本国籍ですが、それらを繋ぐものは実は行政の中には無いんですよ。夫がいなくなったら、子どもがどこかに行ったら、私には何も証明するものが無いんですね。ただの外国人です。

だからそういった面では、日本は震災があったとき、誰が外国人のことを考えるのか。そういう面で、確かに不安はあります。

(キム) それではマイクを戻して、お一人5分くらいの時間内で発言なさるようにしていただけますか。



(イツティ) では少し雰囲気を変えまして、さっきの表2 (P16 参照) をちょっと出しているだけです。これは人間社会は人の数、宗教の種類、国境の線の数、あとは資源がなくなるほど複雑さが増えていきますよね。その中で、表2で2020年やこれから日本の国際化を考える場合、僕は1960年生まれで、2020年にちょうど60歳ですが、自分をあてて考えやすい時期軸ではあります。

日本も2020年、2030年になると、いろんな課題が山積みの時でもありますので、今日は留学生の切り口ですけど、さっき工藤さんから説明がありましたように、現場サイドの要請が非常にあって、留学生からはじまるものであって、実は需要からはじまる場所もありますので、日本だけではなくていろんな国が国際化されているんですね。例えばタイの中でもいろんな国の人が入って、今までにない状況が体験されるわけです。

シンガポールは最たる良い例で、今でも人口を増やしたいので、日本以上にいろんなところから人を集めているわけです。タイの大学を出た人は、先ほどの僕の話じゃないですけど、就職先を探す時には実はシンガポールは人気が高いんですね。なぜならば近いし、英語が出来れば言葉も通じる。シンガポールは日本がやろうとしていることを既に実行してきているんですね。シンガポールは既にそういう時代に突入しています。

僕は日本にいて感じることは、日本の中は国際化していくと思います。そうなる時には、やはり制度を作ったり、いい社会になっていくように仕組みを作っていくことが大事だと思います。そのためにはこの10年、10数年は助走期間というか、今までは割合消極的な増やし方、受入れ方、後先考える余裕

はなかった。でもこれからはもっと真剣に日本の先を考えられたらなあと思います。

この表はいろいろ真意を誤解されたりしますと危険なところはありますが、それがないことを願って、ちょっと言ってみたく思います。あるいはみなさんにも、考えていただきたいと思います。

例えば文系で言いますと、日本に来ている外国人の数は順番からいきますと、中国、韓国、台湾、あとはアメリカ、タイですかね。

将来もこの流れかどうかは実は一つの知りたいことですが。今までのこの割合というのは日本がしかけた要因・政策というよりは、やはり外からの条件が多いと思います。さっきの戦前の話とかの要素を除いて、未来志向的に考えた場合は、これからどこが日本と補完的になって一緒にやったら win-win situation になれるかを考えたのがこの表です。

例えば高齢化ですね。意外とアジアは自分の国が高齢化に向かっているということを知らない。これは非常に深刻で、タイなどでも当然人口専門家はいますが、言っていることは国民はわからない。タイは2020年には今の日本の平均年齢の40歳になります。なるけど国としての貯金はないですね。今の様相ですと、それまでに工業力とか、社会の蓄えを備える力もない。ですから、2020年の高齢化社会のときには日本以上に恐ろしい負荷の高い社会になると議論されています。

それでは、高齢化社会というのは、アジアの課題で、日本もその中でうまくやりたい。でもアジアもそろそろその辺が課題になってきて、大変難しいと思います。

こういう本があります。『老いていくアジア』。これはとてもいい本です。日本の方はこの本に興味はあっても、まだ読まれてないか



と思いますので少し紹介したいと思います。『人口減少社会の設計』。これは日本の高齢化に向かうための本ということで、できれば英訳などをして高齢化に向かっている国の人には読んで欲しい。政策に携わる人に読んでもらいたいですね。この本はアジアの人にも早く読んでもらいたい。そうでないと、国が稼ぐ前に歳を取ってしまうと大変なことになります。これはちょっと誰かに英訳をやっていたら大変いいですね。

そんな中で、ベトナムとインドネシアはまだ人口が増える。そうすると、外の要素もありますが、日本とベトナムはいろんな意味で補完し合うところがありそうです。ちょうど今、アンさんがいますけど、僕としてはそういうふうに見えるわけですね。

今度、人口の増え方、減り方でいっても、ベトナム辺り、インドネシアがあります。で、2020年にかけていろんな国はいろんな競争力をつけたいと思いつながらぬ、悔しいのですが、タイはおそらくまだまだ弱い。弱いので、我々みたいな理系の人は一生涯懸命勉強しても国にはそんなにいい仕事はないですね。観光は一生涯懸命力を入れても理系の人はずいぶん仕事

はない。ない場合には、どこかでいい仕事がしたい。シンガポールに行ったり、日本に来たり。

要は国際協力の面で、ベトナム、インドネシア、タイあたりが2030年にかけて日本と補完的に。日本はリードして、我々はお手伝いできればと。工業レベルも同じような感じですね。では、農業のほうですがや

はりベトナム、タイは日本といい補完ができるかなと。

今度は文化の面ですが、さっきキム先生の名前の呼び方、読み方の難しさを紹介されたんですが、表2には色の薄いところと濃いところがありますが、僕の感覚では、これはまったく僕の主観ですが、こういう感じかなと。

あと、理系か文系かのところがあります。タイは悔しいのですが、一生懸命理系の国にしたくても、なかなか難しい。文系の国という感じはちょっとする。まあ文系というのは定義は難しいですが、広い意味で理系で、日本も理系とみなしますと、中国、韓国、台湾、ベトナムが非常に日本とその辺の協力・補完的と言えるのでは。

文系のほうはインドネシア、タイあたりかなと。日本との歴史的な複雑さを差し置いて、これからは日本語をやるうとする時には、例えばベトナムなんかは一生懸命だし、まだ産業が育っていない分、みんな一生懸命なんです。

タイのエンジニアは大学を卒業しても、みんな、のはほんとしています。就職がすぐに行けるので。ベトナムは優秀な人でもまだ国

内に産業がないので、みんな一生懸命外国語をやらうとする。例えばベトナムに行ったらみんな図書館で夜遅い時間まで語学の独学をやっているんですね。それを見ると全然違う。

で、あとは要は冒険志向というか、日本は非常にチャレンジングな国民性で、ヒマラヤに行ったり、南極に行ったりする国民性ですが、例えばタイの人はそうではないですね。この要素というのは自分の国から出て行く文化的要素があるかないかで、日本のその国々との付き合い方があります。

一方、日本の労働力が足りない部分というのは介護とかのローテクとはいわないですが、サービスの分野は必ず人が要りますので、そういうところの補完もありますね。ハイテクに関してはさっき言ったように沢山の数は要らなくて賢い人が3人、5人集まると化ける世界です。

新しい製品を作る時はダメな人を100人集めてもダメなんですね。やはり1人、2人、3人集まると、ああいう iPod なり、そういうものが出てきますので、世界はそういう人をみんな欲しがります。やはりそういうところは国境に関係なくなっていくんじゃないかと思えます。

僕は自分の国のこともありますが、日本人とのハーフの娘を持っているので、将来の日本はどんな感じかなあとこの表2を考えてみたのがこれなわけです。

みなさんのほうからもご意見をいただければと思います。以上です。



(キム) ありがとうございます。次のかたをお願いいたします。要点を話していただき手短かにお願いします。

(呂) 僕は反省から始めたいと思います。例えば、日本に滞在する外国人ですね、フーさんのように、タレント性があって美声があって、美貌は別としてですね(笑)、そういう人は除いて、じゃあ僕のような人はどうすればいいか。それは、やはり特技があったほうがいいですね。

私の知り合いで、大変料理が上手な人がいて、もう59歳のおじさんなんですが、いつも彼のうちにお邪魔すると日本の若者がいる。特に若い女の子が多い。というのは、彼は近くのスーパーで、2000円ほど材料を買ってきて、美味しい料理を作ると、学生達が来ると、毎日このように賑やかですよ。彼は奥さんと子どもを中国において、一人、59歳の男性ですが、ここで楽しんでいるんです。日本に物凄く友達を作っているんです。その人のご馳走になっちゃったら、だんだん頭までが柔らかくなって、のせられちゃう。

そういう意味では、何か特技を持つと非常に人間の幅が広がるんですね。その点、僕みたいな人はどうしようもないですね。テレビも見ないし、映画も観ない、お坊さんみたいな生活をしていますから、そういう意味ではここでストレス発散するだけになっちゃうんです。

そういう意味では、何か特技を持つと非常に人間の幅が広がるんですね。その点、僕みたいな人はどうしようもないですね。テレビも見ないし、映画も観ない、お坊さんみたいな生活をしていますから、そういう意味ではここでストレス発散するだけになっちゃうんです。

この観点からみると、中国の日本企業は、僕は中国から来たので中国のことしか言えませんが、どこか足りないというか、製品はものすごく売ってますけれど、人間の顔が見えないところがありますね。

2010年に上海で万博をやりますね。僕はちょっとしたきっかけで、その万博の日本展示の総合プロデューサーに会ったことがあって、僕は彼に提案したんです。ブースを出す日本企業に、自社で活躍している中国人の写真とか、私たちの会社はこういうふうには中国人を、あなたの国であなたの国民を使って、訓練して、ここまで利益を出していますよということを出した方がよいと。これを出すか出さないかというのは天と地の差です。

例えば松下もNECも、中国の上海等で自分が作ったケータイ電話がいいとかなんとか広告をたくさん出していますけど、それだけだったらどこの国のを買ってもいいじゃないかということになる。機能はそんなに変わらないんですから。別にNECのを買わなくてもいい。でもNECのケータイ電話の開発陣の中に中国人のリーダーがいて、この人の目が輝いていますと、写真に出ていたら、中国は人は誰でも、この日系企業に入りたいとなりますね。

どうしてそういう意識を強くしたかと言うと、アメリカがイラクに侵攻した時、ヨーロッパ系の雑誌とか新聞を読むと、イスラム系の人の名前が出てくるんですね。ヨーロッパの中東研究所などの人です。

しかし、日本の中東問題研究所の人の論文を見ると、全員日本人ですね。日本の国内において、文献を調べてアメリカとイラクとこうなっていると。どうしてイスラムの人を出さないのか。モハムドでもいいですね、出ていれば、日本はここまで進化してきたかと訴える力になる。要するにイスラムのことを研究するのにイスラム人を使っていると。これは天と地の差ですよ。日本のイメージにおいてですね。

今回オバマさんがアメリカで大統領になって、世界中がわいたんですね。オバマになったら、アメリカはイラクに侵攻して、イラクで悪いことをしたけれど、ちゃんと前に向かって、次の自分を検視していくということを、皆が感じるんですね。そういう意味では、やはり日本の企業はおかしい。

僕は日本の大手銀行でリサーチをやっていたんですが、やはりそこで、日本のメディアが取材しに来ると、同じことを言ったら、彼らは、日本人の名前を出しますという。中国人の名前を出したら、たぶん良くないというんですね。まだそういう意識ですね。要するに、国際交流とか大きなことは言わなくていいです。小さなところから直せばいいんです。

例えば、職場でエレベーターに乗る時、課長とか部長はみんな前に前にいき、若者は両側でボタンを押しているんですね。こういうようなことから直さないと、外国人を平等に扱うというのは非常に難しいですね。外国



人の意識では、例えば、中国人は、上と下の感覚がないですから。だから共産党が人民をおさえつけるのに物凄く苦労しますよね。無いですから、上と下、もともと中国人には。人間は本来平等であるという考えですから。

日本の企業では、皆で社食に行くと、課長とか部長が食べ終わって席を立たないと、みんなトレイを返せないんです。食べ終わったらずっと部長が立つのを待っている。そうすると、中国人は従わなければならないんですよ。たぶんアメリカ人なら先に勝手に返すんですね。目の色が違うから。髪の毛も違うし。でも、中国人と日本人は東洋の文化だと。日本人は東洋の文化を日本の文化と同じと見る。だから中国人はもう出来なくなっちゃうんですね。そういう小さいところから日本人は直していくと、外国人と、もっとスムーズになると思う。

ところで、アメリカは今度サブプライムローンの泥沼に入ってしまった。景気は、いつ盛り返ってくるかわからない。

アメリカはさておいて、世界がどうするかは、アジアにかかっていますね。日本はいかにアジアでのプレゼンスを高めて良さを認識してもらおうかですね。アジアの人たちもたぶん生活レベルが上がってきて、日本の良さがわかってくるんです。表面上は、近代的にこうなっているけど、日本のわびさびとかそういう文化というのは本質を求める文化ですから、こういうのは必ず受けます。

今回のこのことで、改めて日本は、みんなの追う目標になる。そこで日本自身がアピール上手になればと思うんです。要するに美人ではあっても、もうちょっと化粧をして、ハイヒールを履いて、ポーズをとったら男は寄って来るでしょうということです。

そういうこともしていかなければ、せっかくいいものがあったも伝わらないで、そのまま終わっちゃう。

(キム) では、お二方の発言を聞いて、それからにしましょう。



(符) 私は、今日は元留学生ということで喋ってますので、私自身の卒業後の歩みを見るとですね、まず、卒業してから1年間はテレビ局などでの研修を受けて、シンガポールに戻って国営放送に入りました。その時一

番思ったのは、一度日本と縁を持つと一生離れられないという感じです。どこに行っても、会社に入っても、国営放送に入っても、「この人は日本から」と言われる。今日本にいる留学生が将来卒業して国へ帰っても、同じ受け止められ方をすると思います。

私が2年間シンガポールの国営放送に勤めた時、「元日本留学生」という言葉、すごく重く感じました。なぜかという、その時テレビに映った日本が、いいことをやったら日本留学生としては誇りが持てる。でも、日本が悪いことをしたらとても心配で悔しくて。

それから日本に戻って、日本人と結婚しま

した。子育てをまだ一段落できてない時に、主婦だけじゃ不満足で、自分は仕事を持ちたい。日本のテレビ局で働いたり、映像出版社で助監督として勤めました。その時思ったのは、日本留学生の活躍の場はいっぱいあると思いました。問題は、日本の会社が、私たち元日本留学生をどう見ているかということなんです。外国語の問題があれば、フーさん来てください、と言う。放送局は1階から19階まであり、13階は海外番組班で、私は毎日そこに出勤していましたが、19階の社長室から、今外国人のお客さんが来るからと連絡が入ると私は19階まで行きます。

そういう場合には、何か自分が1階から19階まですごい使われ方をしていると思います。でも、色々使われても、私が実際にやりたいニュース番組、私が伝えたいことを伝える、そういう場は与えられなかったんです。日本人と仕事をすると、あなたは「日本人ではない」と見られていることがよくあります。それは嫌です。

私は幸運かも知れませんが、そのあとはシンガポールの新聞社に就職し、今まで特派員としてやってきました。

私が言いたいことは、日本留学生はたくさん才能があるんですね。私の友人達もやりたいことがいっぱいあります。大学で勉強したことを一生懸命発揮したい。ただ日本の会社に入ったら、それが出来るか出来ないかは、日本人と外国人の間で凄く差があります。

そこで、日本に言いたいことは、なぜ日本

留学生が日本に残らないで、他の国に行ってしまうのか。これは、日本が留学生の受入れを10万人、30万人と言っても、日本は留学生のことを心から理解しないままだからです。30万人、100万人の留学生がいても何も心からの言葉が聞こえてこない。日本に来るまでは留学生たちもきっと日本に対して希望を持っていました。しかしその人たちが失望して帰ることが多いのは残念です。石井先生がおっしゃったように、日本人自身が変わらないと、日本という社会が変わらないと、やはり日本留学生はいつになっても、迷いながら、仕事をしたり、生活をしたりすることになる

のではないかと思います。

(キム) 最後になりますけれど、どうぞ。

(アン) 次回呼ばれなくてもいいように覚悟しています。

ですので、ややきつい発言をさせていただきます。符さんとも意見が同じになってしまうかも知れませんが、留学生が日本で勉強したことは一生、ついて回るのです。その運命が、国に帰っても、私は周りを見ているのですが、日本との関係を持ちながら何らかの形で仕事をしています。その意味で、留学生は自国で活躍したほうが良いと私は言っています。

例えば、ベトナムの場合は国に帰っても、日本の現地法人や、日本の企業と取引している会社に入って働いている人が周りにいっぱいいます。その中でも、日本で大学を中退して帰った人もいます。日本ではあまりい





い思い出はないし、学校もちゃんと卒業できなかったし、悪いイメージはあるのですが、それでもベトナムに帰って日本との関係を持ちながらやっていると聞いています。それは運命ですよ。私がホエ先生の誘いで日本に来たのも運命です。それは否定できない。ただそれだったらもっといい方法に向かっていこうじゃないかという意味が僕らの方にはありますので、あとは日本の方々、日本政府がそれをどう受け止めるのか、というのがあってはならないかと思います。

もう一つ、留学生の話なのですが、周りを見てみてもちゃんと大学に入って奨学金をもらって、進学していく人もいればですね、毎日アルバイト漬けで時間がなく勉強ができず、学費と生活費のためにアルバイトをする、それで成績が悪くと、来年になっても奨学金がない、それでまたアルバイトをしなければならない、その悪循環の繰り返しで、4年間の留学生活はアルバイト漬けになってしまう、そういう人もあります。その人に対して、精神的なところだけでもフォローしてあげる人がいれば、最初の1年間、苦しみながら我慢してもうちょっと成績を上げれば、もしかした

ら次の年に奨学金がもらえるかもしれない、悪循環から脱出できたのかもしれない。そういった精神的なケアだけでも意味があると思います。

そういう意味では、留学生を増やしたままそれをケアする人々、例えば大学では留学生担当の方々ですね。その数を整えないで入れていってしまうと、受け入れ

側がパニックになってしまうんですね。僕の出身の大学の学部の留学生担当の先生が話したのは、最近留学生が多くて、問題が多過ぎる。ある時、病気で入院や、住まいのトラブル等が一気に起きてしまい、その先生もパニックになってけっこう苦勞したという話を聞きました。なので、あまり数にこだわらずに、質をちゃんと、今フォローすれば次があります。今を無視して、次だけを見るのであれば、いつか破綻します。

もう一つ、大学時代部活に入っていて日本の先輩後輩関係を身を持って経験しました。練習の時の適切なアドバイス、部活のことだけでなく生活のこと、遊びのこと、そのほかいろいろ日本について教えていただき大変良かったし役に立ちました。しかし、会社に入ってから人間関係には少し戸惑うことが多いです。日本以外の国では仕事では実力主義の国が多い中、日本のほとんどの会社はまだ年功序列であり、外国人には馴染みにくい会社文化・土壌があると思います。今後外国人が日本で働くには、こうした問題があるだろうと思うし、こうした問題にお互いがどう向かい合うかということも課題としてあげること

ができると思います。

最後ですが、唐突な意見かもしれませんが、日本は戦後一人でずっと突っ走ってきたというふうにするのです。それは欧米に対して自分は負けないぞ、という意識からかもしれませんが、その際に周りに味方を付けることを忘れて、ついに、ふと気づいた時に周りに誰もいない。そして自分が疲れてきた。どうしようかと。じゃあ助けを求めようと思うが、周りがまだずっと後ろにいる。その差をどう埋めていくかということが、これからの課題ではないかと思っています。

これはあくまでも漠然とした私の感想なのですけど。私からは以上です。

(キム) ありがとうございます。最後に皆さんの発言を聞いた石井先生が、最初にお話しなさってくださった問題提起との関連で、どういうふうに興味づけるかということを石井先生からまとめて整理していただくのが一番よいのではないかと思っています。

(石井) わたくし、まとめるのが下手なんですけど、今日のお話を承っていて、いくつかのことを感じましたので、そのことを申し上げたいと思います。

日本人は過去160年の間に大きな変化を2回経験しているわけですね。つまり徳川250年の歴史、それでちょんまげをゆって刀を2本差していたのが散切り頭になる。全て、トータルに価値を否定するという経験をしました。

それからヨーロッパに行って勉強して、日本をなんとかして近代化しようとした。その努力の中である種の帝国主義的な発展があって、戦争がおこる。私は実は我ら少国民世代なものですから、私がちょうど小学校2年の

時に、日中戦争がはじまったんですね。それからずっと巻き込まれていく。ところが、中学3年生の時に、戦争が終わったわけです。そこでまた過去明治以降のものを全部否定されたわけです。

わたしはもう教科書に墨を塗るのがうまくなりましたね、全部消さなければいけない。そうすると読むところが少ないんですね。読むところが少ないほうが勉強しやすくていいやとみんな言ってやってたわけですが、そういう大きな変化を2回繰り返したんですね。

ところがその戦後、60年経って、この60年というのは物凄く長い時期なんです。で、私は今日のことを承っていて、やはり世代の違いというのは私はキム先生とあまり歳は違わないのでだいたい感じはよくわかるし、今おっしゃった韓国、朝鮮、在日の問題もよくわかる。

実は私は、NHKが今の韓国語の講座を始める時に、勉強しようと思ひまして、1年間アンニョハセヨとやったわけです。その時一番関心を持ったのは、この言葉をなんと言うかということ。そうしたらスピーカーは私の友人なんですけど、「この言葉では・・」とはじまったんですね。つまり先ほどの話ではないけど、朝鮮語とも言わないし韓国語とも言えない。NHKが変なことを言ったら問題になりますから。ところが今、世間ではハングル語を学びましょうなんて言ってますね。ハングル語なんていう言葉はないわけです。ハングルというのは文字のことですから。

それも今、キム先生がおっしゃったように、正面切っていくかない、逃げて行く姿勢のままに典型的な例だと思います。

私はまずその意味でこの60年代から70年代、大きな価値観の違いがある。で、我々が戦後というと、1945年を思い出すのですが、

多くの方は1945年まだお生まれにならなかったわけですね。で、こないだある学生と話して、「日本ってアメリカと戦争したってマジ？」って聞かれましたね、びっくりしたんですけど、本当にそうですね。考えてみれば、私の世代で日清戦争の話、日露戦争の話の聞いたおそらくそう言っただろうと思います。

それくらい世代は変わってきているわけです。世代が変わってきている間にいろんな意味で違ってきている。私は実は今、オーストラリアに留学している孫がいるんですけど、彼が今度結婚したんです。中国人と結婚したんですね。私はまったく考えてなかったのですが、彼は非常に仲よくした中国人と結婚して今度結婚式をオーストラリアであげ、中国でもあげ、日本でもあげる。

私はそれを聞いた時に、「外国人と結婚するの？」と思うわけです。私はやはり古いんですよ。ところが今の私の孫にしてみると非常に仲がいい女性がいる、一緒に働いていると。一緒になろうって結婚する。

これはやはり世代の問題があるんですね。その意味で歴史的なものの変化というものの中でいろんなものをとらえていかないとまずいというのが1点なんです。その意味で日本人の間にも当然価値観の違いというものが出てくる。

それから今まで想像もしなかったことは、例えば高齢化といった問題が起こって、人材が不足になるという、その文脈でさっきもお話があったように、30万人留学生を入れるよ

うになる。これもかつてはそんなことは考えられなかったことですね。

ですからそんな意味で日本の社会が物凄く変わっていているわけです。ところがその変わっているものを果たして日本人が認識しているかということ、どうもあまり認識してないですね。今日はメディアの方が来られてないのが極めて残念で、メディアの方がおられたら、私は文句を言おうと思ってたんですが、メディアの方がある意味極めて日本的、極めて保守的なんですね。むしろ、メディアの方が我々を引っばって、こっちの方へ行かなければだめだと言ってくれなければいけないの

ですが、いわゆる世間に迎合というわけではないですが、1000万部新聞を売るためには、若干世間の期待しているもの、つまり日本の新聞というのは真実を伝えるのではなくて、日本の読者が読

みたいと思う記事を書かなければいけない。

私はタイにいる間に何人もタイにいる日本の大新聞の新聞記者と話したんですが、こっちが記事を送っても、こんなのダメだとデスクがボツにするというわけですね。つまり真実をよく知っている人が送っても、日本人の感覚と合わないとダメにする。これは非常に具合が悪いと思うんですね。日本というのは世間というのを非常に気にする民族で、これはこれからも変わらないと思うのですが、だとしたら、その世間というものが変わっていかないといけない。

その例、客観的に高齢化の問題、そして人



材が入ってくる。留学生の意味が変わってくるわけですね。こういうものを歴史の文脈の中に見た時に、我々は何をしなければいけないのかということを考えていかなければいけないと思います。

残念ながら、ここだということを知っている人はあまりいないわけで、今日ここに集まっていたみなさんは、そういう意味で本当に意識が高い方だと思うのですが、こういう討論を繰り返してしていくということが非常に大事だと思います。その意味でアジア学生文化協会は大変いい仕事をしておられると、私は思っているわけなんです。

「留学生の問題」を伝統的な意味でとらえるだけでなく、日本が国際化していく文脈の中で、人口の流動性が起こる。その流動性、つまり日本は単一民族か民族じゃないかということ、大臣が怒られ



たりなんかしましたが、そんな問題じゃないわけです。日本の中は物凄い勢いで変わっている。それに対して我々はどういうふうに対応しないといけないのかということを、議論する場というのは絶対に必要なので、今日、私は話を、「日本留学後の進路」というのをむしろ無視して、「ヒューマンネットワーク」だけに絞った理由はそこなんです。

つまり、留学の問題というのはその一部であって、大事なことは人間のネットワークを作るということ。それにはどういう障害があって、どうしたらうまくいくのか、ということ、今日、我々は4人の先生、キムさんを

めて5人の方から大変学んだというふうには思っております。そういう意味でですね、これでもう3回やったから終しまい、と言わないで、ぜひ来年も又やっていただきたいなと思います。どうもありがとうございました。

(キム) 石井先生のお話を聞いて、簡単に私の感想を述べさせていただきたいと思います。本日は「アジアのヒューマンネットワークを問う・2008年～日本留学後の進路」という主題でお話を進めてきましたが、私の考えでは、日本留学をしたアジア人を考えるだけでなく、アジアにおける日本留学の意味を考えると、

もう少し積極的な日本とアジアの関係を築く上で生産的ではないかと思えます。つまり日本の中で、あるいは日本企業で、留学生をどう扱ったかという問題だけでなく、彼らが今日発言したような問題を抱くそれぞれの国と日本、またはアジア諸国との関係を問題提起した点で意味があったのではないかと思います。

それではちょうど時間がきましたので、以上をもって今日のシンポジウムを終了させていただきたいと思えます。みなさま、どうもありがとうございました。

(工藤) 今日は皆様本当にありがとうございました。

(終)